

中学生の社会科観及びその変容に関する実践的研究

－ 評価の民主的参画を軸にして －

学 籍 番 号 249314

氏 名 岡本 慎平

主指導教員 飯島 敏文

副指導教員 八田 幸恵

1. はじめに

本教育実践課題研究の目的は、(1)ある国立大学附属中学校（以下、A 中学校）で学ぶ生徒の社会科観を明らかにしたうえで、(2)評価への民主的参画を意図した実践（「評価の民主化」）を通して、生徒の社会科観はいかに変容したのかを示すこと、である。

先行研究（棚橋ら，2014；大坂，2016）より，学習者の社会科観は，教師が編成する実際の学習や評価に基づいて形成・規定されていくと考えられる。また，社会科で育成されるべき能力目標は，民主主義社会を論理的な前提としており（児玉，2012），民主主義社会において学習者に要請される人間像は，社会の出来事について自律的に判断できることとする社会科論が存在する（池野，2001）。さらに昨今では，学習者が評価においても自律的であることが求められている（Earl，2003）。今後，学習者が社会科の学習や評価に自律的に関わっていくのであれば，それらをどのように捉えているのかという学習者の社会科観は注目に値する。

なお，社会科教育における授業（学習）と評価の現状について，授業は，民主主義社会という論理的前提に基づき，多様な方法原理が構築され，体现されてきた（全国社会科教育学会編，2011）。しかし，評価は，理論と実践を一体化する方法論が未確立であり（峯，2014），学校現場では，教師が評価実践におけるすべてを引き受け，絶対権力者のようにふるまわざるを得ない状況となっている（藤本，2023）。そこで，上記の解決方途として，評価に生徒が参加することによって，評価における教師の権力性分散をねらいとした「評価の民主化」に着目する。

2. A中学校で学ぶ生徒の社会科観

本章では，A 中学校で学ぶ生徒の社会科観を，担当教師の社会科観との関連から明らかにすることを目的とし，岡島（2018）の手法に基づく社会科教師2名へのインタビュー調査と，宅島（2021a,b）を参考にした両教師の指導を受ける生徒64名を対象とした作問調査を実施した。その結果，X 教師は社会参画の基礎となる知識の習得を，Y 教師は社会事象を理解するための補助線の獲得を社会科の本質として捉えていた。一方，生徒たちの作問は授業内容の「再生」が大半を占めた。以上から，①生徒たちは，教師の影響を一定程度受けつつも，「新たな知識を創り出すよりも既存の知識を理解すること」を重視する社会科観が形成されており，②その背景には，教師の社会科観を把握できても，評価観はブラックボックス化されているため，生徒たちは被教育体験に立脚した自身の評価観に基づいて，「再生」作問を行ったと結論づけた。

3. 「参加と責任のシステム」としての評価活動による 学習観の変容

本章では、「評価の民主化」を意図した『参加と責任のシステム』としての評価活動（鬼塚・藤本，2021）を通して、生徒の社会科観，特に学習観の変容を明らかにした。具体的には，A 中学校の3年生105名を対象に，歴史的分野小单元「武士による支配の完成」に関するパフォーマンス評価を用いた評価活動を展開し，異議申し立てや振り返り記述，及び南浦ら（2011）を援用した学習観に関する質問紙調査（プレ・ポストテスト）を分析した。その結果，生徒たちは評価活動への参加を通して課題への納得感や責任意識を高めるとともに，「教養的知識の獲得」を保持しながら「自己の意見の構築」を重視する学習観へと変容していることが示された。一方で，ルーブリックの記述語が生徒の既存の評価観と結びつくことで，教師の意図とは異なる形で解釈・運用されてしまい，「ルーブリックの破れ」（石田，2021）が生じるという課題が明らかとなった。

4. 「回収箱モデル」ルーブリックを用いたピアレビュー 評価活動による評価観の変容

本章では，前章で課題とされた「ルーブリックの破れ」を克服するため，「評価の民主化」を拡大した評価活動を通して，生徒の社会科観，特に評価観の変容を検討した。そこで，「評価の民主化」を拡大した評価活動として，学習者がルーブリックの作成に参加するスティーブンス & レビ（2014）の「回収箱モデル」ルーブリックと，生徒の自己評価力向上がねらいである岩田・田口（2019）の「協議ワークを取り入れたピアレビュー」を行った。しかし，授業時数の制約や研究報告書作成を優先した計画変更，授業者の楽観的想定に加えて，中学生という生活共同体の性格の強さからピア評価が甘くなるなど，当初想定した効果検証は困難となった。一方で，生徒たちの記述や評価結果からは，「文章量が多い方がよい」という従来の評価観が揺らぎ，簡潔さや読みやすさを重視する方向への変容が一部に見られた。また，本章は，実践の失敗を含めて記録・考察した点に意義があるとした。

5. おわりに

本教育実践課題研究の成果として2点記す。第一に，学習者の社会科観形成に関する仮説を，調査及び実践を通して検証を行い，学習者の社会科観は授業者によって変容し得る可能性を示した点である。第二に，客観性と再現性の担保を金科玉条にするべきではないとする論考（柳瀬，2017）も存在する教科教育学において，追試による教育実践の効果検証を実施したことである。

一方で，課題として2点記す。第一に，確認された社会科観の変容が，同時並行で2つの社会科授業が実施されていたため，「評価の民主化」を意図した実践によるものであると厳密に特定できない点である。第二に，評価権限を教師から生徒へより拡大していくことが「評価の民主化」といえるのかという理論的検証が求められる点である。